

いふは、いみじきひがことなり、略○中また生大日本豊秋津洲とあるは、天の下の大號にもなりて
の後の世よりいへる語にして、神代の當昔の言にはあらず、略○中夜麻登は一國の名なるが、天の
下の大號にもなり、又一國の内にて、わきて京師をさしてもいひて、廣くも狭くも用ひらる、號
なるが故なり、そは筑紫といふも、伊豫といふも、一國の名なるを、九國四國の大名にもして、筑紫
洲伊豫之二名洲などいへる例に同じ、略○中夜麻登といふは、本よりの大號にはあらず、一國の名
より轉れること疑ひもなし、すべてもとは狭き名の、後に廣くなれる例おほし、出羽加賀なども、
もとは郡の名なりしを取て、國の名とはせられつること、國史に見え、略○中夜麻登といふ名の意
は、萬葉考の一つの考へに、此國は四方みな山門より出入れば、山門國と名を負るなりと有て、そ
のよし委くゑるされたり、此説ぞ宜しかるべき、又己宣長○本居が考へあり、そはまづ書紀神武御卷
に、天皇の御言に、此國の事を聞於鹽土老翁曰、東有美地青山四周云々と見え、又大己貴命は、玉璫
内國と目けたまひ、又古事記倭建命の御歌に、夜麻登波久爾能麻本呂波多々那豆久阿袁加岐夜
麻碁母禮流夜麻登志宇流波斯とよみたまひ、又石比賣命の御歌に、袁陀氏夜麻夜麻登云々とよ
みたまふ、此比賣命の御歌なるは、かの倭郷をのたまへるなれども、袁陀氏夜麻といふは、一國の
倭によれる枕詞にて、楯を立並べたる如くに、山のめぐれるをのたまへるなり、右の伴の古言ど
もみな、此國は山の周廻れる中にあることをいへるなれば、夜麻の山なることは論なし、登には
三つの考へあり、一つには、登は處にて、山處の意なるべし、略○中二つには、登は都富の約まりたる
にて、山都富なるべし、略○中三つには、登は、宇都の宇を省き、都を通はしいへるにて、山宇都の國な
るべし、略○中上件師賀茂の山門の説と、己が此三つの考へとのうち、見む人心のよらむかたを
とりてよ、

〔倭訓栞前編三十四〕やまと 日本大和をよむは義訓也、山跡の義といへる尤舊き説也、とは多く